

網走沖ではまだ流氷が見られるようですが、昨年は2月28日には海明けを迎えていました。各地で春の準備が始まっていることと思います。

▼オホーツク総合振興局では平成28年の漁業生産状況（速報）をとりまとめています。これによりますと管内の生産量は約175千トンで前年（208千トン）の約84%、生産金額も約602億円と前年（626億円）より減少する見込みです。ただしホタテガイや秋サケなどの単価が好調だったため、生産量の減少をカバーして600億円台は維持できそうです。生産量の減少は、平成26年の低気圧の影響が続いているホタテガイが29年ぶりに100千トンを下回ることや秋サケ、スケトウダラ、ホッケ、スルメイカなどが低調だったことが影響し、昭和41年以来の50年ぶりに200千トンを下回る状況とのことです。

▼北海道全体の漁業生産状況（速報）は、数量で約87万トン（前年100万トン）、金額で2,944億円（同3,016億円）となる見込みで、数量では現在の統計（北海道水産現勢）を取り始めた昭和33年以降、初めて100万トンを下回るようです。数量の減少は、台風などの影響や主要魚種であるホタテガイ、秋サケ、サンマ、ホッケ、スルメイカなどの不漁が重なったことが考えられます。

▼近年、漁獲量の減少が著しい魚種にホッケがあげられます。最近では価格も高騰し、高級魚並みの扱いとなってきているようです。オホーツク海に分布するホッケは道北群と呼ばれ、日本海の産卵場でふ化し、大部分の仔魚は成長しながらオホーツク海へ移動し、成魚になると再び日本海に戻ると考えられています。1998年に205千トンに達した漁獲量は、2008年までは100～150千トンを維持していましたが、その後急減して2015年には1985年以降で最低の16千トンにまで落ち込みました。近年の減少要因の1つとして2009年生まれと2010年生まれの生き残りが2年続けて不調となり、2011年以降に子世代を生む親魚が激減したことが考えられています。この対策として2012年から網数や操業期間などの漁獲強度を3年間3割以上削減し、資源の回復を図って来ましたが、資源の減少を食い止めるまでにも至っていない状況です。2015年からさらに3割削減を3年間延長した取り組みを進めていますが、生まれた仔稚魚などの生存に影響する海洋環境も近年あまり良好とは言えない状況にあるようです。ホッケ道北群の資源評価結果は次に掲載しています。

<http://www.fishexp.hro.or.jp/exp/central/kanri/SigenHyoka/Kokai/>

▼昨年の秋に主に日本海で生まれたホッケは今ごろ、体長10cmくらいになり沿岸から沖合の表層に広く分布していることと思います。夏にかけてオホーツク海沖合などでアオボッケとなり、秋には体長20cmくらいのロウソクボッケとなって、たくさんの群れがオホーツク海沿岸に来遊してくれることを願っています。

（網走水試 上田）